



ミズベ スクール6

MIZBE SCHOOL 6

官民を超える
対話力※・行動力を
身に付けよう

加古川

※対話力とは…相手の本質的な意見を引き出し、異なる立場や考え方を互いに理解し合うこと。

REPORT

2023.1.27





ミズベ
スクール6
MIZBE SCHOOL 6



開会挨拶 加古川市長 岡田康裕



加古川市としては、人口減少が進んでいく中でも加古川らしい加古川ならではの魅力を今一度作り上げていきたいという思いがあります。そこで、エキチカの河川敷空間を活かしたまちづくりをやっていこうということで「加古川市協働のまちづくり推進事業補助金」などの取り組みを進めているところです。

商店街の通りも、さびしい眺めになってしまったところがありますが、ゆくゆくは歴史風景の再整備ということも、5年10年かけて取り組んでいこうとしています。そうして駅前から河川敷、さらにもう少し南の方までを含めた回遊できるような面的な賑わいづくりというのをやっていきたいと考えています。

その一番の核となるのが河川敷の水辺空間だと思っています。今回、いろんなところからお越しいただいておりますが、立場も違えば見える景色も違うと思いますし、気づかれる点もあると思います。それをぜひ、私たちに教えていただきたい、そしてより良いものに仕上げたいと思っていますので、よろしくお願い申し上げます。

PROGRAM

- 10:00 開会挨拶
加古川市長 岡田康裕
- 10:30 「水辺」と「水辺につながるまちなか」の現地視察
市担当者が加古川河川敷やそこにつながるまちなかでの取組や市民団体との関わりを説明
- 13:00 トークセッション
テーマ「ミズベリングやかわまちづくりをやると思った動機は？自治体の方々がやる気になったのはどうして？」
加古川の水辺活用での官民連携の背景、行政としての想いについてセッション
- 14:00 市民団体・事業者グループインタビュー
加古川河川敷やまちなかで賑わいを取り戻す取組に参画する団体・事業者にインタビュー
- 15:00 編集会議
加古川市やまちなかの取組・官民の関わりについて「見て、聞いて、感じた」結果をグループでまとめ発表
- 17:00 閉会挨拶
加古川市副市長 中田 直文

キーワードは「対話力」&「行動力」。

官民一体で水辺とまちが一体となった景観をつくり、にぎわいのムーブメントを起こすことで地域の活性化を目指すプロジェクト「ミズベリング」。にぎわいのある水辺づくりを学ぶミズベスクールの6回目のフィールドは、兵庫県加古川市です。水辺とまちをつなぐ様々な取り組みを展開している加古川市と、その取り組みに参加した市民団体・事業者の皆さんの実践から官民を超える対話力・行動力について学びました。思いを形にするにはどう行動するか、様々な背景を背負う人たちとどう対話するか。参加者一人ひとりが真剣に考える機会となりました。



「水辺」と「水辺につながるまちなか」の現地視察

加古川市担当者による加古川河川敷やそこにつながるまちなかでの取組、市民団体との関わりについて、説明を受けながら「加古川市かわまちづくり」の実例を見て歩きました。



ファシリテーター
岩本 唯史氏

加古川市では、かつて宿場町として栄えた歴史的景観の再生を計画するなど、まちなかに回遊性を生み出そうとしている。
回遊性の核となるのは、川。川が良くなることで、まちにどんな影響があるのか、またどんな人がいて、どんな課題があるのか、見てきてほしい。



計画対象

1 加古川駅周辺



加古川市政策企画課が実施する実証実験の概要説明

駅前広場等を活用した官民連携の実証実験について、加古川市政策企画課の方から説明がありました。加古川駅周辺においては、駅利用者のうち半数が滞在時間30分程度という課題があり、イベント等が開催されることにより滞在時間の延長、来訪のきっかけを作りたいと考えていること、市では警察署との協議などで開催をサポートし、令和5年1月までに7イベントが開催され集客の手応えを得たことなどの説明がありました。道路空間を使用する場合の警察との協議、平日の開催などが今後の課題として残るものの、令和6年3月まで期間があるので「参加者の皆さんにも意見をいただきたい」とのメッセージがありました。

2 加古川河川敷



市民団体によるイベントの実施状況などの説明

加古川河川敷の北側は、市民団体によるイベントのメイン会場となっています。マラソンコースが整備され、ランニングやサイクリングなどで普段から市民に親しまれている場所です。今後は「加古川市かわまちづくり計画」の一環としてゾーニングを実施、国土交通省とも役割分担して公園整備や堤防整備などを検討していることが報告されました。そして、今後も市民団体によるイベントを通じて賑わいを作り出し、魅力的な河川敷づくり、まちづくりを進めていきたいとの説明がありました。

3 加古川南側の堤防上



令和4年9月実施のキッチンカー社会実験の紹介

ここは「加古川市かわまちづくり計画」において、盛り土整備を行い、民間事業者を公募により募集して賑わいの拠点を作り出すという計画があります。そのための社会実験として、令和4年9月・10月に「加古川deリバーkitchen」というイベントが実施されました。公募によるキッチンカーの出店は最大10台に及び、およそ3500人ほどの来場がありました。出店者からも「非常にいい場所だ」ということで好評をいただき、次年度以降も新しい形で、いろんな社会実験をやりたいとお話がありました。

4 寺家町商店街



まち側で実施している加古川での取り組みを紹介

加古川市内の東西を結ぶ商店街。このエリアは旧西国街道の宿場町として栄えていました。加古川市では宿場町としての歴史的な景観の再生を図り、駅・まち・川の回遊性を向上させたい思いがあります。商店街自体も活性化への思いは強く、蚤の市や土曜の市などを定期的に行っていました。そこで、川につながる駅前商店街のエリアづくりに生かしていく社会実験として、令和4年10月に「かわのまちマーケット」を開催。72店舗が出店し、盛況だったとの説明がありました。

5 かわのまちリビング



「かわのまちマーケット」を共催したNPO法人代表からマーケットの実施結果などについて説明

寺家町商店街の中にある「かわのまちリビング」は、令和3年にオープンしたコミュニティスペース。ここで、NPO法人シミンズシーズの阪口努さんから、令和4年10月に開催した「かわのまちマーケット」についてお話をいただきました。
阪口さんは、加古川市の「かわまちづくり計画」策定のプロセスとして、市民みんなで河川敷の利用や周辺の賑わいづくりを考えようと、令和3年7月～10月の間、ワークショップを実施。その中で挙げられた179のアイデアと44の具体策は、「加古川市かわまちづくり計画」に市民の意見としてまとめられています。そして、河川敷だけでなく商店街のにぎわいをどう作るのか、その実践として行ったのが「かわのまちマーケット」とのこと。出店の申込みが殺到し、「自分たちでこの駅前を作っていこう」という人が多いことに可能性を感じたと言います。そして「自分たちで河川敷やエリアをどう育てるかが大事」と話され、参加者は、市民自らが熱心に活動していることに感銘を受けた様子でした。

トークセッション

加古川の水辺活用にあたり、官民連携をどのように進めていったのか、そして行政としての思いについて語らいただきました。

オリエンテーション

対話の能力を磨き行動につなげよう

従前のやり方からの脱却=行政と市民との協働

共に学び、「ミズベ人材」を育成することを目的として開催してきたミズベスクールも6回目。今年のテーマは「対話の能力や行動に繋げる」です。なぜそれをしなくてはならないか、その理由は、「変革する価値観」にあります。



岩本 唯史氏

戦後の焼け跡の何もないところからつくり上げてきたのが日本のインフラ整備です。「とにかくつくること」が目的だった。しかし、人口減少、頻発する自然災害、インフラの維持、合意形成の必要、幸福度の変化などが社会課題となっている中、従前のやり方ではインフラを維持できなくなり、やり方の転換が必要になっています。今やインフラ整備の目的はつくることではなく、地域の社会課題解決、そして、地域の未来を担う人が必要だということを前提にしなければなりません。ですから、行政と市民の協働は、時代の趨勢としては当たり前だと思うんです。

官民連携の第一歩「対話からはじめよう」

従前のやり方を変えるにはどうしたらいいのかを考えたときに、インフラ整備の在り方を先取りしている制度として「河川敷地占用許可準則の河川オープン化」「かわまちづくり支援制度」という、とてもいいテスト事例があります。加古川市さんはまさにここに注目されたのだと思います。

これらの事例の根幹でもある官民連携の第一歩は、「対話から始めよう」ということではないでしょうか。例えば阪口さんのお話など、皆さん興味津々でしたよね。話を引き出すためには、まず相手に興味を持たなければ始まりません。対話する場をどう設定するかの第一歩でもあります。

そして、対話をする中で、それぞれ立場が違う、目的が違うことも明確になってくる。例えば、阪口さんたちにとっては、河川敷の利活用が目的ではないですよね。違う目的を持っていて、その目的とは何なのか。それを聞いた上で協働できる関係をどうしたらつくれるか。そのプロセスが、対話力の基礎であると考えています。

それを学んでもらって、地元を持ち帰っていただき、実践できるようにするのが今回のミズベスクールの目標です。皆さん、どうぞよろしくをお願いします。



登壇者紹介



株式会社水辺総研
岩本 唯史氏

国交省のミズベリングプロジェクトのディレクターを務めるほか、自治体や鉄道事業者の開発案件における水辺利活用のコンサルテーションも行っている。

河川管理者でも公園管理者でもない「市民活動推進課」のかわまちづくり

岩本 まず、加古川市のかわまちづくりについて、山野さんから紹介をお願いします。

山野 「河川敷を活用して新しいまちづくりに取り組みたい」という市長のお話を企画部からいただいたときに思ったのは、「河川管理者でも公園管理者でもない私たちが何をどう進めていったらいいのか」ということでした。かわまちづくりの支援制度があることも勉強して初めて知りましたが、協働推進課には権限がなく、ない知恵を絞ってたどりついたのが「加古川市協働のまちづくり推進事業補助金」という補助事業です。それをコンセプトにできないかというところからスタートしました。それが令和3年のことですね。この制度の中に「加古川河川敷を活かしたにぎわいづくりの主旨に沿って取り組む事業」を新しく対象に加えまして、企画サイドからも上限100万円、補助率100%というなかなかいい条件を設定してもらえました。でも、どれくらい手が挙がることかと、募集をかけるときは不安だったのですが、幸い12もの団体さんから申し込みがあって、9事業をこの年に実施することができました。多くの方に河川敷に遊びに来ていただき、評判を呼びまして、令和4年度には21の団体からの申し込みがありました。これもひとえに市民団体の皆さんが熱意をもってイベントを開催いただいた賜物です。主役は市民の皆さん、私どもは行政にしかできないことをさせていただきながら皆さんをサポートし、協働のかわまちづくりを盛り上げていきたいと思っています。

Point 1

異なる立場である三者のトークセッションを聞き、互いの意見の引き出し方を学ぶ

対話力の向上

Point 2

話の内容から参加者が自分たちでも出来ることはないが、各自持ち帰ってもらい今後の「水辺活用」に関する取組について気運を高めてもらう

行動力の向上

登壇者紹介



加古川市 市民協働部
市民活動推進課
かわまちづくり
推進担当課長
山野 貴史氏

2021年から庁内の6部局で構成するワーキンググループのリーダーとして加古川河川敷を活かした新たな賑わいづくりプロジェクトに従事し、2022年から専任。

縦割りではなく、様々な部局と「横串」を通すことが大事

岩本 普通、行政の人たちがミズベリングの仕事割り振りするとき、河川の部局に任せることが多いけれど、加古川市はそうではなかったんですね。

春藤 それに、加古川市さんの場合は、ひとつの部局だけが行うのではなく、ほかのいろいろな部局とも連携されているのが特徴ですね。

山野 プロジェクトとしては市民協働部が中心となって進めています。どうしてもいろんな部局の協力がが必要です。建設部門、産業振興部門、観光振興部門、企画部門など、様々な部局やプロジェクトを組んで丸一となって進めていく必要がある。あくまで私は旗振り役、推進役が役割だと思っています。

岩本 2020年の12月に初めて加古川市さんに呼ばれた時に山野さんたちに頼まれたのが、庁内の勉強会で関係部署の人たちにミズベリングを説明してくれということでした。横串を通さなければ最初から見越しておられた、そのひとつの窓口として勉強会という形で実施されたのはポイント高かったと思います。それだけ膨大なコミュニケーションを取ってかわまちづくりをされているということですね。

山野 最初にかわまちづくりのお話をいただいたときに、「これは市民協働部でできる範囲を遥かに超えている、とてもじゃないけど手に負えないんじゃないか」と、戦々恐々だったんです。とにかく庁内の関係ありそうな部局と意識共有する場を作らなければ孤立する、ヤバイ、と必死でした(笑)。

岩本 「水辺の話だからそれに関係している部局だけで」では絶対うまくいかないという教訓ですね。ちゃんと横串通さ

登壇者紹介



国土交通省 近畿地方整備局
姫路河川国道事務所
総括保全対策官
春藤 千之氏

2021年から加古川の河川管理者として河川整備を担当、かわまちづくりにも携わる。加古川市民でもあり、趣味のジョギングで加古川河川敷にも親しんでいる。

ないと、市に何のメリットをもたらさない。

春藤 河川管理者の立場としても、山野さんが関係する部局の皆さんと一緒に話し合いにも来てくださって、皆さんと一緒にやっていきたいという思いを後押ししていただき、事務所としても前向きに取り組んでいるかなと思っています。

まちのシンボル・加古川の魅力がまち全体に波及

岩本 かわまちづくりの取り組みがまちに波及して、まちの良好な関係づくりにつながって、全体最適としてまちそのものが活性化するところと言うと、加古川市の皆さんの取り組みはその機運を作った、役割を十分果たしていると言えるのではないのでしょうか。

山野 かわまちづくりには、加古川市のシンボルでもある一級河川・加古川の魅力を広めたいという思いもあるんです。加古川市には何もないと言われるんですが、いや加古川があるじゃないかと。その魅力を伸ばしていくためのかわまちづくりが、周辺のまちづくりにつながっていたという実感があります。寺家町商店街のマーケット、駅前での社会実験などもその例です。川の魅力というものがまち全体に波及しているんだろうなと実感しています。

岩本 川が良くなれば絶対にいい影響でまちに波及するんですよね。山野さんたち行政はもちろん、一緒に活動している市民団体の皆さんもその環境を作り上げ、貢献していると思うんです。その協働の姿を今日まさに見ていただけると思うので、今回ここでミズベスクールを開催して良かったと思っています。



市民団体 グループインタビュー

加古川河川敷やまちなかで賑わいを取り戻す取り組みに参加している市民団体にリレー式でインタビュー。相手の本質的な意見や考え方を引き出します。

インタビュー対象者

主催 NPO法人シミズシーズ

イベント **かわのまちマーケット**

阪口努氏(NPO法人シミズシーズ)

加古川駅前と河川敷の間にある、寺家町商店街でまちの人が楽しめるイベントとして、雑貨店や飲食店などおよそ70店舗が出店するマーケットを開催。

第1回 令和4年10月23日
来場者5,500人



主催 一般社団法人きずな

イベント **加古川河川敷大道芸フェスティバル**

小林賢人氏(一般社団法人きずな)

ジャグリングのワークショップとストリートパフォーマンス、ゲストパフォーマーによる大道芸大会を同時開催。飲食店も多数出店。

第1回 令和3年6月26日
来場者1,000人
第2回 令和4年6月25日
来場者1,000人



主催 加古川スケートボード協会

イベント **わくわくプロジェクト**
～河川敷巨大公園化プロジェクト～

樋口典宏氏(加古川スケートボード協会)

気球搭乗体験をメインに、スケートボードの無料体験やダンス、イルミネーション等を取り入れたイベントを開催し、加古川河川敷を巨大公園化する。

第1回 令和3年11月20・21日
来場者2,100人
第2回 令和4年11月19・20日
来場者2,000人



主催 green walkers

イベント **加古川 RIVERSIDE FITNESS FESTA**

小谷祐美氏(green walkers)

屋外ヨガやボルダリング、SUP、カヤック、ノルディックウォーキング等の河川敷のアクティビティイベントを実施。また、同時に飲食店も出店。

第1回 令和3年10月24日
来場者1,000人
第2回 令和4年5月22日
来場者1,000人



主催 株式会社ムサシ

イベント **河川敷シェアベンチ事業**

岡本篤氏(株式会社ムサシ)

加古川河川敷で使用されるベンチを作成するワークショップを開催。また、昨年8月に開催され、10,000人が来場した「SAVE KAKOGAWAFES」では、会場全体の空間演出や加古川河川敷初の夜間開催イベントの中心的役割を担った。

第1回 令和4年5月21日
来場者1,000人
第2回 令和4年8月13・14日
来場者10,000人
※主催は実行委員会



主催 加古川市

イベント **加古川 de リバー Kitchen**

山野貴史氏(加古川市)
春藤千之氏(姫路河川国道事務所)

加古川河川敷を活かした新たな賑わいづくりの一環として、「河川空間のオープン化」(都市・地域再生等利用区域の指定)に向け、加古川左岸堤防上で様々なジャンルのキッチンカーを集めた社会実験イベントを開催。

第1回 令和4年10月23日
来場者5,500人



Point 1 加古川市の事例を基に、意見の示し方・相手の意見の引き出し方を学ぶ

対話力の向上

Point 2 参加者は聴いた内容を踏まえ、自分たちがどの段階にいるかを把握し、次に起こすべき行動について考えてもらう

行動力の向上

まずは
相手に興味を
持つことが大事!



インタビュー

NPO法人シミズシーズ



警察との協働と実績づくり

Q 駅前では社会実験をやったことがあるのですが、警察との協議が難航しまして。株式会社も絡んだイベントだったので、個人的にやろうとすると挑戦だと思うのですが、実績を作れば変わっていくと思いませんか？

A 条例をつくって変えていかないと、私も思っています。警察のほうも、例えば保健所ならこう、店舗ならこう、というメニューがなく、どう取り扱ったらいいのか困っていると思います。直接話す方は理解を示してくれても、組織だから上の方が決めるので、その意味では実績を作っていくのもひとつの方法かなと思います。

地域とのコミュニケーション

Q 商店街でのイベントを開催するとき、地域を巻き込む必要があると思いますが、反対などありましたか？

A ありました。だから、日常的なコミュニケーションがどれだけ取れているかが重要ですね。私は保育園も運営していますが、お散歩のときなどに子どもが「こんにちは」なんて挨拶すると、普段挨拶してくださらない方でも返してくれたり、最近は向こうから挨拶してくれるようになりました。普段からそういったコミュニケーションを大事にしていると、イベントやりたい、賛同してほしいというときに理解が得やすいというのはあると思います。単発でなく継続してやっていきたいという思いがあるので、なおさらですね。

一般社団法人きずな



河川敷で大道芸の意味

Q 大道芸は道路のそばや広場でやるのがメジャーかなと思うのですが、なぜ敢えて河川敷なんなのでしょう？

A まあ、補助が出るというのが一番の理由ではあったんですが(笑)。ただ、日本って結構大道芸の大会が多いんです。それを河川敷でやってみるのも面白いかなと思ったのがスタートです。確かにストリートで見るのがメジャーなんですが、そのイメージを覆していけたらいいかなと思ったんです。

河川敷だけでなくまちなかが賑わうのが理想

Q 駅裏のスペースなど利用できそうですが、どうですか？

A あそこいいですね。大道芸には理想的な場所なんです。ほか

の団体さんが河川敷でイベントをやっているときに、その駅裏であるとか、あるいは寺家町であったりニッケさん※であったりでパフォーマンスするというのが理想なんじゃないかなと私は思っているんです。河川敷にメイン会場つくって、寺家町やニッケさんとかにパフォーマーがいるような、河川敷だけでなく駅前も、まちなかが盛り上がりつつ、そんな形にできれば理想だなと思っています。河川敷だけでやる場合も、駅からの距離、駐車場やトイレ、交通渋滞やそれに対するクレームなど課題がありますし、それでも来たいと思わせる仕掛けをどうするかも含めて、いろいろ考えていきたいと思っています。姫路駅前で行っているウォークアブルな町みたいなのを加古川でも取り入れるといいかなと思います。

※ニッケ(日本毛織株式会社):日本の毛織物メーカー。加古川市内に複合型ショッピングセンターである「ニッケパークタウン」の運営事業も行っている。

グループインタビューリレー

加古川河川敷やまちなかで賑わいを取り戻す取り組みに参加している市民団体にリレー式でインタビュー。相手の本質的な意見や考え方を引き出します。

なぜ(WHY)を共有できるかがグループインタビューのカギ!



Point

1

加古川市の事例を基に、意見の示し方・相手の意見の引き出し方を学ぶ

対話力の向上

Point

2

参加者は聴いた内容を踏まえ、自分たちがどの段階にいるかを把握し、次に起こすべき行動について考えてもらう

行動力の向上

インタビュー

加古川スケートボード協会



プレーヤーを表舞台に、来場者を笑顔に

Q イベントを開催する目的は何ですか？

A 来場していただいた方に笑顔になってもらうことですね。それに今コロナで大会とかもあまりないし、表舞台に立てるようなこういう環境を作ってあげて、プレーヤーも楽しんでもらいたいなと。それを見て、スケボー知らない人でも「わあ、すごい」とちょっとでも思っていたらいいなと。

「せっかく来たのに体験できない」を避ける工夫

Q 気球はすごく人気で混んでて体験できなかった人も多かったのでは？

A 当日受付していたときはもう長蛇の列で、結局乗れなかったと

いう人がいて、それはよくないと私も思いました。2回目は事前申し込みにしました。搭乗する人をあらかじめ決めて、キャンセルが出たら乗せてあげるという感じで。

利益以上に得られるもの

Q イベントを開催するのは大変ですけど、利益は出るんでしょうか？

A 全くなし(笑)。ボランティアです。お金はむしろなくなったかもしれないけれど、でももっとすごいものを得られたというのが実感です。人とのつながりも増えたり、参加して下さる方から「今年やってくれてありがとう」と言われると、やって良かったと思います。

株式会社ムサシ



河川敷利用の高いハードルを越えたまちの可能性と伸びしろ

Q 河川敷の利用には、利用者すべてが平等であることを求められますし、説明も求められるのでハードルが高いと感じますが、どう思われますか？

A 手続きが多すぎるというのは非常に感じています。河川敷は座れるところがない、ベンチを置きたいと思ってシェアベンチ事業をしたときも、すごくそれを感じました。もう少し自由に河川敷を使えるようにならないかな。釣りがしたければたっていいし、屋台持ってきて販売したいならさせるくらいの裁量があってもいいと思うんです。そこで何か問題が出てきたらそのときに考えればいい。イベントやりたければ申請してください

い、問題ないようにつつがなく、粛々とやってください、河川敷を盛り上げてほしいというのは、イトコ取りなんじゃないかなと(笑)。

ガンガン利用してもらったほうが、河川敷を利用するプレーヤーも増えると思う。面白いことやってくれる強烈なプレーヤーも出現する。そうして初めて、河川敷に活気が出てくるんじゃないでしょうか。河川敷って、都市空間に残されたワイルドな空間ですよ。それをきれいに管理しようとする、面白くなっちゃう気がします。

加古川市にとってももったいないと思いますよ。町としての可能性、伸びしろが無量大にありますから。民間の力をもっと活用してほしいなと思っています。

green walkers



河川敷でフィットネスをする魅力

Q フィットネスは公園でもできると思いますがなぜ河川敷なのですか？

A もともと自然豊かなところでやりたいというのがあったのと、加古川を初めて見たとき、「めっちゃロケーションいい、ここを使わないなんてもったいない」「ここで運動できたら最高」って思ったんです。でも当時はいろんなルールがあって使えず断念していたんですが、賑わいづくりの補助金事業を見て、飛びつくようにして手を挙げました。ここで運動ができたら絶対に楽しい、そこは自信あります。爽快感を感じてもらえるのではないかなと思います。実際に

子どもからお年寄りまで来てくれて喜んでくださいました。参加者さんの喜びが私の幸福です。

河川敷を利用することで環境に対する意識を変える

Q 河川敷でイベントを行う特別性は何でしょうか？

A 環境に対する意識をいい方向に変える可能性があることでしょうか。「加古川でイベントなんて汚いしやめとく」という声もあったし、ある参加者さんも、同じように思っていたようなんですが、実際に来てみたら「意外にきれいね」と感動していらっしゃいました。なるほど、こういうメリットもあるんだなと思いました。

加古川市



かわまちづくりの課題とこれから

Q 駅からの動線、回遊性は具体的にどのように作り出そうとしているのですか？

A 河川敷への距離がそこそこありますが歩けないほどではない、しかも道中には商店街や大型商業施設もある。そこどうつなげていこうか。そのための工夫や仕掛けは、まちづくりや駅周辺の整備、民間との協働も含めて模索中というのが正直なところ。河川管理者、道路管理者、市の関係部局も巻き込んでやっていく必要がありますし、これからのかわまちづくりの大きな課題です。

Q 河川敷をイベントなどで利用できることをそもそも知らない人がいるんじゃないかというのを聞きましたが、知ってもらうためにはどのように発信しますか？

A 補助金の事業で団体を募集したときにも、「河川敷を使っているんですか？」という声がありました。河川管理者も公園管理者もダメとは言っていないのですが、そう思われているんだということを私たちが痛感しました。利用できるということをどう発信していくかも課題として取り組みたいと思います。

Q 堤防上に盛り土して賑わい拠点をつくるというお話がありましたが、国土交通省から反対はなかったのですか？

A 実際の施工は国土交通省さんがやってくれることになっています。もともと市が計画したもので、姫路河川国道事務所さんとの協議過程で、「堤防事業としてやりましょう」と言ってくださって。かわまちづくりに国が協力を示してくださった一例で、とてもありがたいなと思っています。

編集会議

これまでの内容を踏まえ加古川河川敷やまちなかの取り組み、官民連携について「見て、聞いて、感じた」ことをグループで討議し、結果をまとめ、発表しました。発表を通じて官民連携で水辺を活用する上で何が大切かを参加者全員が学びました。

発表

1班

現状を見て、理想を発見し、未来の水辺を展望

市民団体へのリレーインタビューを総合して次のようにまとめました。



- **きっかけ(現状)**: イベントを開催しようと思った動機を聞いたところ、総合的に必ずしも河川敷である必要はなかったという結論
- **見つけた水辺の魅力(理想)**: しかし実際に河川敷でイベントを開催してみると、改めて水辺の魅力に気づかされ多くの発見⇒「夕陽がきれい」「広いスペース」「芝や緑がある」など
- **ギャップを埋めるサポート(要素)**: 水辺の魅力を活かし、イベントを継続させるために必要なものは何かを聞いたところ、「電気」「水道」「トイレ」「人件費」「倉庫」「警備員」のほか、「各団体とのマッチング」も必要であるとの指摘
実際に河川敷でイベントを開催した市民団体からのリアルな意見を聞くことができ、管理者としても利用者としても、具体策に直結できる学びが多くあったと感じています。

4班

協働とチャレンジ

阪口氏、岡本氏、行政へのインタビューから得るものが多くありました。



- **阪口氏**: 子どもが町で育つ環境が必要／小さなエリアでの小規模なまちづくり／SNSで情報を発信、口コミで仲間づくり／人材育成、警察の規制緩和が今後の課題
- **岡本氏**: 都市空間で一番広いのは河川敷。もっと好きなことをする人が増えるといい／河川敷利用のための手続きが多く負担
- **行政**: 行政の役割とは横のつながり、橋渡し／補助金の事業でやりたい人がたくさんいることが判明／川を使えることを知らない人も。発信に必要なものは⇒自分が使ってみること
これらのお話から引き出したキーワードが「協働とチャレンジ」であり、具体策として次の3点を検討すべきと考えました。
- **広大な河川敷の活用とインフラ整備**
- **「まちをよくしたい!」「まちをおもしろくしたい!」人材の発掘・育成**
- **民間の自由な発想を行政がサポート**



2班

STEP UP加古川 需要と供給(加古川と企画団体)

樋口氏、小林氏、阪口氏へのインタビューから、それぞれの活動を次のように結論付けました。



- **記憶に残る体験を～スケートボード&気球**: 気球とスケボーのマッチングで来場者に感動を／コロナで大会減、プレーヤーに舞台を提供／スケボーがより応援される未来を展望
- **新時代へ大道芸～みんなを笑顔に**: 老若男女問わず楽しめることを周知⇒社会的地位の向上／スポンサーによる継続開催を期待
- **緑の下の力持ちみんなをつなぐ未来へのかけ橋**: 活性化を目的としたエリアマネジメント／保育園児を通じた高齢者との交流
そして、共通の見出しとして「STEP UP加古川 需要と供給(加古川と企画団体)」としました。加古川と企画団体、両者の需要と供給がマッチしているからこそ河川敷は盛り上がっていくのだと思いました。今後は需要と供給のバランスを取り、その思いをつないでいくことが重要であり、かわまちづくりのこれからの方向性になると考えました。



5班

つながりが大事

岡本氏、行政、小谷氏へのインタビューから次のような情報や示唆を得ました。



- **岡本氏**: 川で遊びたい人はたくさんいる／「誰と」やるかが一番大事。補助金が出るとはいえ事業として成り立つことが重要／継続性を重視
- **行政**: 加古川市は民間と民間の横のつながりが他市に比べて非常に高い。そのネットワークを大事に／駅から河川敷まで歩ける距離、非常に恵まれている／かわまちづくりの延長線上にまちづくりがある
- **古谷さん**: SNSで広報⇒SNS慣れている子どもが参加／日常的な河川敷活用が理想
共通点として浮かび上がってきたのが「つながりの大切さ」。それを「魅力」と「方向性」の観点から考察しました。
- **「魅力」**: 市民団体同士のつながりが強い／駅から歩ける河川敷／水面、広場、高水敷も利用しやすい
- **「方向性」**: 駅から河川敷につながる賑わい／市民団体同士のつながりと勢いの継承／日常的に利用できる河川敷



3班

もっとみんなが使いやすい加古川へ

小林氏、阪口氏、岡本氏へのインタビューを次のようにまとめてみました。



- **小林氏「活躍の場を」**: パフォーマーに活躍の場を与えるという考えが素晴らしい。反面、パフォーマーにもっと謝礼を渡したい、トイレやステージがないことも課題
- **阪口氏「もっと活気を」**: マーケット開催を告知すると出店希望者が多く、地域コミュニケーションの大切さを実感。商店街はお店が減少し維持費がかさんでいる。その対策を考える機会にもなった
- **岡本氏「河川敷にベンチを」**: イベントが楽しめるようにと利益はほとんどないがベンチを貸し出しているという活動に尊敬の念
共通しているのは、「人と人とのつながり」が大きいということ。また、それぞれのインタビューから、加古川を良くしたいと思う人が大勢いる、その思いに応えるためにも、みんなが集まりやすい加古川にすることが肝要と考えました。

6班

イベントの継続と駅周辺とのつながりが課題

行政、小谷氏、樋口氏へのインタビューから、かわまちづくりの今後の方向性を考えました。



- **行政**: 加古川市長の一声で補助金100%⇒地域一体となってかわまちづくりをどう盛り上げていくか／姫路河川国道事務所は、河川の自由利用との観点で「YES」で受け止めていく／行政として市民の意見を吸い上げたかわまちづくりを推進
- **古谷氏**: 加古川河川敷で開催した理由は、ここでなら自分が推す自然の中での運動ができる／広場だけなのでかえって自由な活動ができる／シャワーやトイレ、駐車場などの設備があれば、より気軽に利用できるようになる
- **樋口氏**: めったに体験できない気球・気軽に体験できるスケボーの対称的なイベント⇒来場者が楽しめることが重要／長時間滞在できる工夫が必要
そして今後の方向性は、何も障害物がない河川敷だからこそ自由に企画ができる点を活かし、トイレや水道等の整備、申請手続きの簡略化を進め、横のつながりを継続することでイベントの継続と駅とのつながりを作ることと考えました。



編集会議

これまでの内容を踏まえ、加古川河川敷やまちなかの取り組み、官民連携について「見て、聞いて、感じた」ことをグループで討議し、結果をまとめ、発表しました。発表を通じて官民連携で水辺を活用する上で何が大切かを参加者全員が学びました。

講評

1班

「なぜ」という問いが大切であるとオリエンテーションでお話ししました。このレポートの場合は「ギャップを埋めるサポート」として、公金を投入していく必要があると結論づけていますが、それは実際に河川敷でイベントしたら出てきた課題で、そこが「なぜ」になるのかなと思うんです。なぜ公金を投入しなくてはいけないのかという点をさらに追加できると良いと思いました。ミズベリングをなぜ市や国でやるのか、この川でやるのかという理由として、たとえばイベントを行うことで情熱であるとか労働性を引き出すことができた、つまり人が育っているということが理由になるかもしれません。市がサポートすることで市の未来にどんな意味があるのかというところを理屈にできるといいですね。それがあれば、多くの人々が納得してプロジェクトを推進する機運にもつながると思います。

2班

水辺がなぜ魅力的なのかということをもっと足してほしいなと思いましたね。それと需要と供給、これはニワトリと卵の関係で、需要があるわけでもないけど可能性はある。その可能性のベースを一生懸命持ち歩いているのが今なんだと思うんですね。それが本物の需要に追いついてきたら、絶対文化になると思うんで、それを目指していこうという提言だと捉えています。それにしても皆さん、「初めまして」の状態でグループ組んで、いろいろな制約がある中でディスカッションして、しかも活気づいているのはすごいと思います。

3班

「人が活躍できる場」というキーワードが抽出できたのはすばらしいと思います。人が活躍できる場があると、町の人々が明るく元気になれる、結果「市民力」が向上するという効果も期待できます。それを下支えするためにトイレや電気などのインフラが必要という提言でもあったと理解しました。「人と人とのつながり」の提言も評価できます。これが一番大事。まちづくりはまずそこが最初であって、いかにいろんな人を知っているかがカギになります。

4班

人材発掘という言葉が出てきたのは良いと思うんですが、さらに、どんな人が出てきたら、どんな未来が描けるのか、そこも触れていただけたらもっと良かったと思います。行政の役割というお話もあって、行政が取り組みに参加する姿勢であるとか、社会の情勢によって規制やルールが変わるなかで利用者の立場に立って柔軟に対応するとか、そういったところも「協働とチャレンジ」として、管理者にも気づきを与える発表だったと思います。

5班

つながりという言葉は別の言葉に置き換えられないでしょうか。例えば人と人がつながって、何か新しい構造を持つときのベースとなるコミュニケーションの場とか。お金ではない形の資産であって、かわまちづくりの事業を通して、その資産が作られていくというような。

それと、次の世代として子どもに川に遊びに来てほしいという点を抽出できたのは良いと思います。子どもが環境に興味を持てるような、自然にどんどん触れるようなスペースにするというのはひとつの提言として成り立つと思います。

6班

小谷さんが「もったいない」と思った、これを見出しにしても良かったと思います。加古川という川が資源化できることに気づいた、ということでもありますよね。スケートボードのイベントにしても、スケボーだけのイベントにしてしまうと閉鎖的になる、興味のある人だけのイベントになるけれども、加古川を会場にすることで加古川の魅力も伝えることができるというお話があったと思います。加古川市に住んでいる人でも、近くに住んでいなければ川に来ないという状況がありますので、川の魅力も伝えていく、そういう側面があるということも提言できるといいかなと思いました。



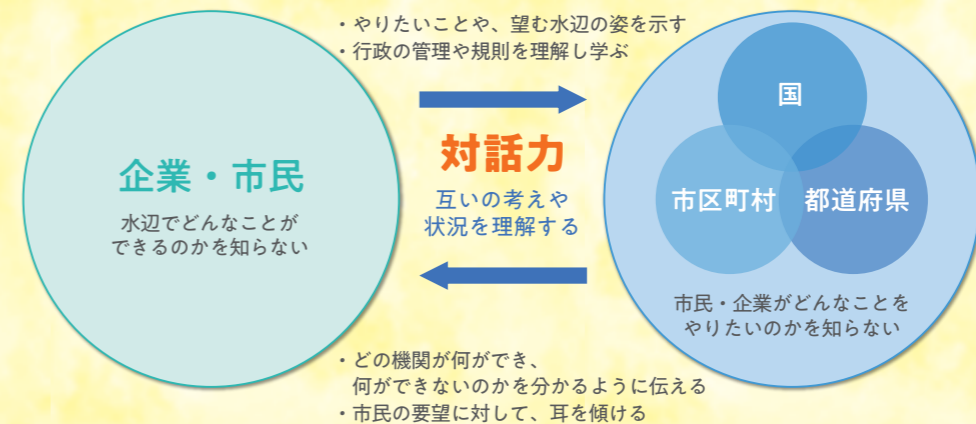
全体講評

岩本 唯史 氏

皆さん、大変真摯に取り組んでいただいて、網羅的に関わっていただいて、充実したスクールになったと思います。皆さんも満足した様子で良かったです。今年のミズベリングのテーマのひとつが「対話」、その能力を生かす行動に繋げる、というのが最終目標です。

対話を開くためには何が必要かを、実際に体験・体感していただいたと思いますし、ご自身の中でも、その答えが出てきたんじゃないかなという風に思いますので、ぜひ、これをお持ち帰りいただいて、ご自身の活動に繋げていただきたいという風に思っております。

加古川市の実例を基に、意見の示し方、相手の意見の引き出し方を学ぶ。
⇒対話力の向上



近畿地方整備局 河川部 広域水管理官
竹中 一滋

皆さん、ありがとうございました。私たちは洪水対策が使命でございますが、中でもこのようなソフト対策・ミズベリングも看板政策でございます。いろんな人の意見をくみ上げて、安全に遊べる川、楽しい川をつくっていきたいというのも我々の思いでございます。いろんな権限があると思いますけれども、目指すところは同じでございますので、いろいろ議論させていただき、活かされていくとよいと思います。ありがとうございました。

閉会挨拶



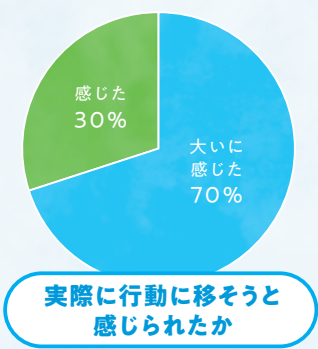
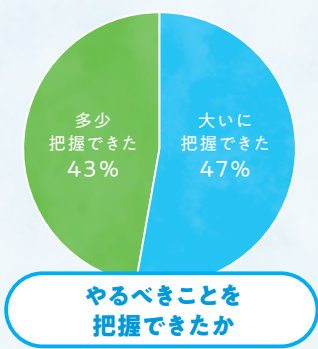
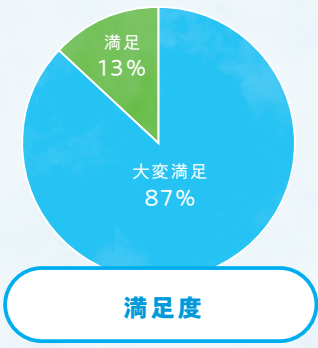
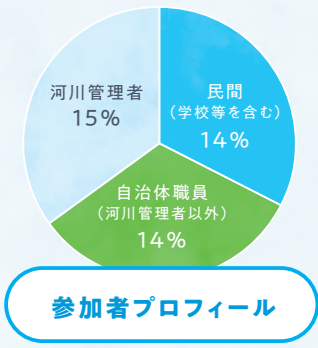
加古川副市長
中田 直文

盛りだくさんのスクールで、いろんな学び、気づきがあったのではないかと思います。ぜひ持ち帰っていただいて、皆さんそれぞれの場で活かしていただけたらうれしいと思います。かわまちづくりは行政だけではできません。官民連携が不可欠でございますので、市民団体の皆様とも一緒員、水辺環境づくりを進めていきたいと思っております。引き続き、ご協力をお願い致します。



参加者アンケート

学んでつながって、うごきはじめた水辺の未来



参加者のご意見

なかなか実行に移せざにいたが、今回参加したことで水辺活動の可能性を感じることができました。ありがとうございました。

当市でもかわまちづくりを推進しており、他団体の事例を知ることができ、非常に有意義でした。

取組みを進めても回りが付いてきてくれるか心配であったが、今回初めて参加し、やるべきことが見えて参加してよかったです。

自ら動き、いろんな人と会話することが必要だと感じた。もっと実際に進んでいるかわまちづくりの現場も見たい。

地域関係者との連携だけでなく、行政間の理解と連携が必要であり、今回のように官民間わす話話し、つながりを深めることが大切だと感じた。

周囲と積極的に関わり、ネットワークを創出し活かすことが必要だと感じた。やはり”人とのつながり”が大切だと思います。

他県、他市町の水辺利活用について知る機会が今までなかったが、今回加古川市の取組みを知ることができ、学ぶことが多かった。

「かわで〇〇をしたい」という思いを発掘し、「前例がないから」という考えを捨て、ダメ元でも何か動いてみることの大切さを感じた。

ミズベリングに関するお問い合わせ > MAIL:kkk-kasenmizube@mliit.go.jp

「ミズベスクール」最新情報は公式facebookページをチェック!
<https://www.facebook.com/mizubeschool/>



「いいね!」を押して参加しよう!

主催: 国土交通省 近畿地方整備局

